

国際観光三十年の思い出

池田 淳

そろそろ退職する年齢になってきたので、昭和三四年に運輸省観光局に入ってから今日まで約三〇年間の色々な思い出を書かせて頂くことにしました。

二〇年史のこと

私が高等海難審判庁という小さな役所から運輸省観光局という中央官庁へ転任したのは今から二年前の昭和四四年七月十六日、特殊法人日本観光協会が設立（昭和四四年四月八日）された直後であった。以来ずっと国際観光の仕事に携わってきたこともあって、昭和五九年に「国際観光振興会二〇年のあゆみ」を書かせて頂き、それが一生の思い出となった。その当時の苦労話は後に書かせて頂くこととするが、年表や索引などを工夫して自分の思うようなものを作らせて頂いたこと、特装版の装丁を私が愛蔵している昭和三年刊の芥川龍之介全集に似た紺の布装とさせてもらったこと、そして国際観光振興会の生みの親である梶本保邦元会長（現日本観光協会会長）に題字を書いて頂いたことが非常に嬉しかった。

観光局業務課のこと

運輸省観光局へ配置換えになったいきさつは、高等海難審判庁で海事関係条約の翻訳をやっていたことが当時観光局業務課におら

れた若尾宏さん（元日本旅客船協会理事長）の耳に入り、丁度転任することになっていた石井深智夫さん（元経理部次長）の後任に採用されたのである。

採用時の面接は、当時業務課（現旅行業課）の課長補佐をされていた北田勝助さん（元バンコック所長・事業部長）がされた。北田さんとは、その後も長い長い付き合いとなった。

当時の業務課には後に当会へこられた柳昭夫さん（元サンフランシスコ所長・現東武鉄道常務）、藤野義明さん（元TIC資料室主任）、八幡得一郎さん（元総務部調査役）、別所重治郎さん（元編集部嘱託、写真担当）、海谷秀三さん（元ホテル事務所所長・海外鉄道技術協力協会調査企画部長）、西川修さん（元シドニー所長・情報管理部長）がおられ、そのほか中村忠生さん（元日本観光開発財団青少年旅行部長）、高木巳之助さん（元全国旅行業協会専務理事）も上司で、役付きでないのは私だけという大変な頭でっかちの課であった。

これら諸先輩の逸話は数限りなくあるが、直接国際観光とは関係がないので割愛させて頂く。ただ多士済済の集まりで、毎晩のように五〇円会費、百円会費でウイスキーを買いに行かされていた。つまみは、別所さんが次官室や官房長室へ行って、強引に調達してき

ガラス、フランクフルト、サンパウロ、香港と六カ所の海外事務所とTICを創設されたのである。

また、世界にその例を見ない「観光基本法（昭和三八年六月一〇日公布施行）」と「観光白書（昭和三六年二月一五日发布）」の生みの親である。

観光のはなし

上記のわが国最初の観光白書は原題は「観光のはなし」で、サブタイトルが「国際観光の現状」となっている。私は、当時の計画課長補佐の石月さん（元ロンドン事務所所員、現日本国鉄道算事業団理事）から旅行あつ旋業と外客のルートについて書くよう命ぜられた。

特に思い出となっているのが、当会の「訪日外客訪問地調査」の原型ともいうような調査を行ったことである。当時訪日観光客はグループで旅行することが多かったが、一五人以上のグループについては、観光局で観光団証明を発行すれば国鉄の団体運賃割引が受けられる制度があり、一般旅行あつ旋業者からグループの旅程を付けて証明書の交付依頼が出されていた。そこで、この旅程を分析して、外客がどういうルートを通ってどこを訪れているかを調査した。集計の方法は当時行われていた「パンチカード」を利用した。これにより、旅は外客の旅行ルート、訪問地等がある程度分かれるようになった。

観光白書は、その後も十数年間その一部を書いていたので、いろいろ思い出がある。

ノーチップ制の通達

東京オリニピックを二年後に控えた昭和

た。

JATAの設立

当時の業務課長は、後に長年JATA（当時「国際旅行者協会」、後に「日本旅行業協会」）の専務理事をされた小田部康さんで、JATA設立時（昭和四四年六月一〇日）の旅行あつ旋業（後に「旅行業」）の担当課長であった。また、その前任者は福永正美さん（元ニューヨーク事務所所長・理事）で「先代さま」と呼ばれていた。

私は業務課へ入ってから旅行あつ旋業の担当をしていたので、JATA関係者との付き合いは随分古い。当時の業界はインバウンドが主流で、業界の大先達にはインバウンド出身の方が多い。JTBの石田会長をはじめ、富士海外の岡田さん、ジュエットの菅原さん、阪急の阿部さん、坂根さん、東急の大八木さん、近所の霜峰さんなど、当時若手の課長や係長であった方が後に社長、重役になられ、すでに引退された方も多い。

JATAの事務局は当初JTB内に置かれ、昭和三七年に独立の事務所を持ったが、当時事務局におられたのは森田栄次郎さんと今もJATAにおられる小池富美子さんのお二人だけという小世帯であった。今とは隔世の感がある。

三七年五月に、海外宣伝のためと外客接遇の向上を図る意味から、「ノーチップ制」の徹底について」という通達をホテル・旅館業界をはじめ関係各方面に出した。この通達は国鉄の車掌さんや関西汽船が早速実行することを申し合わせるなどのニュースが一般紙で報道されたため意外に大きな反響があった。ノーチップ制は、政府登録ホテルはもともと実施していたが、旅館のお手伝いさんにはかなり恨まれたのではないかと未だに思っている。

観光基本法のこと

有名な、世界にも例を見ない法律である「観光基本法」については、梶本さんの著書「観光よもやま話」の中に当時の苦心談、エピソードがいろいろ書いてある。今の若い人達は、まだ基本法そのものも読んでいないと思うが、一度「よもやま話」とともに読んで見ることをお勧めしたい。

この基本法の前文に書かれている観光の意義、また、第一条の国の政策目標は極めて長い文章ではあるが、観光の意義と効用、そして国の施策と目標が実に簡潔にうまく書かれている。一つの観光地への過度の集中の緩和とか地域格差の是正など、単なる観光事業振興法ではない。

別府市の観光協会の会長さんが、この観光基本法の前文を書いたものを額縁に入れて、協会の壁に掛けていらしたのが、けだし名文である。

JNTOの発足

梶本さんは、観光基本法を制定された後、日本観光協会法の改正、旅行あつ旋業法の改正、国際観光ホテル整備法の改正を、東京

邦人旅行あつ旋業
国内旅行業は当時「邦人旅行あつ旋業」と言っていたが、まだ海外旅行が制限されていた頃なので、国内旅行業界が活発に活動していた。切符の入手が困難な湘南準急を利用した伊豆への温泉旅行や、貸切バスによる団体旅行が盛んであった。

大部分の県には、すでに旅行あつ旋業の団体があり、その中央団体として全国旅行業団体連合会（略称「全旅団連」、現在の社団法人全国旅行業協会の前身で昭和三二年二月に設立）があった。

都道府県単位の協会で、当時活動が活発であったのは、東京都、千葉県、神奈川県、埼玉県、福島県、新潟県、静岡県、愛知県などの旅行業協会で、これらの協会の会合には、しばしば出席していた。

梶本さんのこと

観光局へ入ってから二年経った昭和三六年七月、現日本観光協会会長、元当会会長の梶本さんが観光局長となられ、オリニピック対策、観光基本法の制定、日本観光協会法の改正による社団法人日本観光協会法と特殊法人国際観光振興会の発足、国連ローマ会議の準備、旅行あつ旋業法の改正等の作業が始まり非常に忙しい時代を迎えた。

梶本さんの功績を記すとすると正に枚挙にいとまがない。当振興会のことだけに限っても、TICの生みの親であり、国際観光振興会自体の生みの親であり、テレツーリストも創設された。さらに就任された当時七カ所しかなかった観光宣伝事務所を一五カ所まで増やすことを大蔵省と内々取り極められ、観光局長在任三年間の間にロンドン、シドニー、

観光局へ入って
1990 (平成2)

オリンピックの準備で忙しい最中になされた方である。

改正案の検討、問題点の検討などは、局長室に十数人集まって、常に午後六時頃から始まり、終電にギリギリ間に合う時間まで続いたのが普通であった。

昭和三十四年に財団法人国際観光協会と社団法人全日本観光連盟を合体させて一つの特殊法人となった団体を、なぜ五年後にまた二つに分けるようになったか、その理由は二〇年史に収録してある堀本局長の国会における答弁内容から読みとって頂きたい。

前にも述べたように、堀本局長の在任中に当会の組織（事務所数）、定員、予算（補助金等）は急激に拡大したのである。

ローカル・ガイド

前記の三つの法律の改正の際、通訳案内業法の改正についても、もちろん検討された。検討課題は、未だにかなり多くの人が提唱しているローカル・ガイドの導入である。地方におけるガイド不足、あるいはツアーに全行程添乗員又はガイドを付けず、到着地点からガイドを付けて経費を削減したいという旅行業者の希望があった。さらにガイド試験は難かし過ぎるので、ローカル・ガイドについては試験を易しくして合格し易くしてはどうかという意見があった。

当時、問題点とその解決の方法を随分議論した。一つは、ローカル・ガイドの場合営業区域を限定することとなるであろうが、営業区域を県単位にするとうる違反者が出ると思われ、例えれば京都・奈良・大阪のようにつながってお客様に同行するケースが出るであろうという問題、また、ローカル・ガイド

の地理・歴史・一般常識の試験は、営業区域内の知識に大体限定して行うこととなるのであるが、日本の紹介を行うガイドが日本について一般的な質問には答えられない程度の人で良いのか、例えれば日光の案内人やバスガイドのように、テラレコーダーのように丸暗記していることを一方的にしゃべりまくるだけの人でよいのかという問題、試験の出題内容・レベルが地方によってまちまちとなるであろうが、どうやってある程度のレベルを保ち不均衡とならないようにすればよいのかという問題、語学能力（特にヒヤリング、会話力）のレベルを落すことは先づきできないが、やはり地方によってレベルの低い人が出てきて外客から苦情がでるのではないかと、問題等色々議論したが、結局法改正は見送られることとなった。

ローマ会議

I.U.O.T.O.（官設観光機関国際同盟）の努力により、昭和三十八年八月二日から九月五日まで、ローマにおいて国際連合主催の「国際旅行・観光会議」が開催された。この会議は、国際旅行を容易にするため、旅券、査証、出入国管理、通関、検疫、旅行用外貨割当、空港税等、出入国手続きのあらゆる面について容易化方策の統一基準を定め、その実施を各国政府に勧告することを主たる目的としたもので、我が国では運輸省観光局が会議に提出される勧告案について我が国としての対応策のとりまとめを行なった。当時の我が国の入出国手続きは、欧州諸国とそれと比べるとかなり遅れていたため、勧告案の内容は各省庁とも容易にこれを受け入れられるものではなかったが、その頃我が国はOECDへの加

宝章を受賞されている。

トラベル・ジャーナルとお付き合ひ

トラベル・ジャーナル誌とお付き合ひは創刊（昭和三十一年五月一日）以来である。森谷社長・笠木副社長とはお互いに若い頃からお付き合ひしてきた。最初の頃はニュースになるような情報をいろいろ提供していたが、次第に海外の旅行・航空関係ニュースを毎号「海外ニュース」として執筆するようになった。さらに昭和四十六年一月二十五日から同年一月八日まで「旅行・観光関係用語解説」を毎号執筆した。

海外ニュースの執筆は、ホノルルから帰ってきた昭和五〇年に復活し、その後も十年間続けた。こういつたことから、トラジャルが一九八四年に刊行した「日本人の海外旅行二〇年」の年表作成その他のお手伝いもした。この年表と「国際観光振興会二〇年の歩み」に掲載した年表を合わせると、各年の観光、旅行、行政、旅行業、航空、海陸交通、ホテル、社会、海外事情等の膨大な年表となる。

海外宣伝・国際関係の担当に

昭和三十九年頃から旅行あつ旋業の仕事と国際関係の仕事をするようになった。当初はコンベンション・ビューローの研究とOECDの文書の内容の検討。I.U.O.T.O.の理事会、総会の資料の翻訳や対処方針の作成、観光局へ来る外国語の手紙に対する回答書き等で、浜野さん（元ニューヨーク事務所所員・ロスアンゼルス所長・事業部長、現国際観光サービス・センター専務理事）が係長でいつも昼ご飯を一緒にしていた。

盟準備を進めていたため、OECDの決定と同じような内容を持つ勧告案について、各省とも非常に前向きに取り組んでもらった。お蔭で外務省の旅券課、法務省の入国管理局総務課と入国審査課、大蔵省関税局監視課等の担当官の人達と親しくなり、それが、その後の私の仕事の上で非常に役立った。

この会議は通称「ローマ会議」と呼ばれ、

我が国の首席代表は堀本観光局長、代表が外務省旅券課長と在イタリア日本国大使館参事官、そのほか代表代理、顧問、オブザーバー計一〇名が出席した大会議である。当会からは顧問として間島理事、オブザーバーとして渡辺幸雄さん（当時ロンドン事務所次長、後シドニー所長、事業部長）が出席された。

オリンピック対策

東京オリンピックから関係した仕事も多い。観光局として一番大変だったのは宿泊対策で、東京ヒルトン、東京プリンス、羽田東急、ホテルニューオータニ等の大ホテルが開業前に開業したものの、予想される観光客を到底収容できる客室数は確保できず、あらゆるタイプの宿泊施設の確保に努力した。言葉の問題でも随分色々な対策が講じられた。通訳案内業試験は通常のもののほか、臨時に試験を行い、それでも不十分であるとして、善意通訳の募集を行い二万五千人にパッジを配布した。現在の善意通訳と違うのは、八カ国語の語別パッジを作成した点である。また、東京商工会議所が中心となって、都内の外客の利用に適する商店、飲食店等約四千店を選定し、各店にIGSS（国際親善店）の看板を掲げさせた。全国の主要観光地にはレストハウス（トイレ）及び英文案内地図板を

OECDへの加盟

先進国グループOECDへの加盟は我が国の念願であり、昭和三十八年にはOECDの既存の諸決定の内容の検討を行ない、我が国としてそれを受諾できるかどうかの詰めの作業を行った。最大の問題は旅行用外貨割当であったが、昭和三十九年四月一日に一人一回五〇ドルということで制限付きながら自由化され、同日IMF8条国へ移行し、四月二十八日、OECDへの加盟が正式に認められた。これにより、我が国の入出国手続の容易化が急速に促進された。

日本コンベンション・ビューローの設立
昭和三十九年六月から、観光局、日本商工会議所、日本ホテル協会、（財）日本交通公社、国際観光振興会とで、コンベンション・ビューロー研究会を作り、日本コンベンション・ビューローを設立する上での問題点、設立する場合の運営形態と事業内容、資金の拠出者等を検討し、回を重ねて具体的な設立案を作成した。その結果、長年の懸念は翌年の6月の設立でようやく実を結んだ。

国際観光年とI.U.O.T.O.東京総会

観光関係、特に国際観光関係で開催された空前絶後の行事が昭和四十二年の国際観光年記念行事である。これは、国連が一九六七年を観光年（International Tourist Year）に指定し、国連加盟各国に各種の記念行事を実施するよう要請したもので、同年には我が国のみならず世界各国でさまざまな行事が実施されたが、開催された行事の数、規模、質において最高のものは、日本が実施した行事である（各国が実施した行事については、「国際

設置した。

外客に対する料飲税の非課税措置が実施されたほか、宿泊料金その他の値上げが行われないう厳重な指導が行われた。

都民の間での語学学習熱が高まり、警察官やタクシー運転手等を対象に英会話講習会の開催、日英会話帳、日英会話カードの配布などが行われた。

これらの東京オリンピックの準備対策の経験は、その後次々次に開催された大型イベント、大型国際会議（昭和四十二年の国際観光年とI.U.O.T.O.東京総会、昭和四十四年のASTA東京大会、昭和四十五年の大阪万博、昭和四十八年のPATA東京総会）の準備に生かされ、観光局も当会もこれらの行事、イベントを問題なくこなすことができるようになった。

堀本三副会長

昭和三十九年四月一日、国際観光振興会の発足と同時に堀本三副会長を迎えた。堀本副会長のことを知っている人はもう少なくなつたが、戦前は鉄道省業務局長、鉄道総局長官、戦後は参議院議員をされ方で、堀本局長が無理矢理口説いてかつぎ出された経緯が前述の「観光よもやま話」に書かれている。

堀本副会長が来られてから前述した大型国際会議や大型イベントが、次々次々と開催されたが、足立会長（日本商工会議所会頭）、堀本副会長がおられただけで、資金集めも、総理大臣のご出席や皇太子殿下のご臨席なども、さしたる困難なく実現した。

堀本副会長の功績で忘れてならないのは、昭和四十二年二月の「観光資源保護財団」の設立である。堀本副会長は昭和四十二年四月に当会会長になられ、日をおかずして熱一等端

観光年記念施策「行事報告書昭和四三年三月三十一日、財団法人官設観光機関国際同盟東京総会及び国際観光年記念行事協力会刊」に記載されている。

同年実施した記念行事の一部については後述するが、五四に及び行事・施策がマスコミの注目を集めつつ盛大に実施できた最大の理由は、前にも述べたとおり、足立会長、堀木副会長という超大物を当会が抱えていたことによる。八千万円の資金集めにしても、各種記念行事の実施に際しての各方面の協力にしても、大変ではあったが比較的容易に行うことができた。

また、世界各国の公的観光機関の団体であるIUOTO（官設観光機関国際同盟。現在のWTOの前身）の総会を、第二〇回という節目に、しかも、IUOTOの働き掛けにより実現した国際観光年という記念すべき年に我が国で華やかに開催できたことも、関係者にとって非常に嬉しいことであった。

この比較規模の大きい、各国の観光大臣を始め政府高官が集まった公的な国際会議を観光局と当会（もちろん我が国観光業界の協力も大きかったが）で手掛け、成功させたことは大きな自信につながり、それが後年ASTA、PATAという大会議を誘致するきっかけとなった。また、当会がコンベンションの誘致、運営の指導を、堂々といえるようになったのも、この総会を経験したお蔭と言える。

財団づくり

今でこそ当会も財団づくりの経験者が増えてきたが、国際観光年の記念行事とIUOTO総会を実施するために作った財団（財団

キャバレー、バーの取締り

日本のバーは高いという外国人の苦情が多いので、国際観光年の機会に少しでもこれを改善してもらおうと警察庁と打合せ、観光局長から依頼文書を出したところ、警察庁から各管区警察、警視庁、各都道府県警察本部へ風俗営業関係者に対する遵守事項の指導、取締りを強化するより通達が出され、さらに全国防犯主務課長会議において趣旨説明が行われた。

その後、ある日残業をしていたところ、たまたま外国人観光客から赤坂のバーで高いお金を払われたとの苦情の電話がかかってきた。そこでこれはいい機会だと、警察庁へ電話したところ担当者からそれでは解決しに行きましよう、所轄の警察と一緒に現場へ急行した。場所はホテルニュージャパンの道路を隔てた前の一角にある比較的大きなバーで、早速苦情を申し出た外国人に事情を聴き、その店に事実を確かめたところ、テーブルチャージ、つまみ等非常に高い。そこで警察官が料金表の提示を求めたところ、それがなく、結局店の方が謝って料金を半分に返して解決した。

ローマ会議の時、国際観光年の時と、警察庁とはいろいろ折衝したが、非常に気持ちよく対応してもらった。

皇居の見学

IUOTOの総会時に、外国のVIPからこの機会に皇居の見学をしたいとの希望が出てきた。一般の人の見学は時間が決められて行われていたが、急なことなので皇太子殿下のご臨席をお願いに行って面識のできた宮内

法人官設観光機関国際同盟東京総会及び国際観光年記念行事協力会は、観光関係団体の長はもとより、私鉄、財界、マスコミ、都道府県のトップを網羅した大きなものであった（顧問二名、副会長八名、理事二名、評議員四名、参事五二名）。大きいことは良いことであるが、膨大な書類を揃えるのが本当に大変であった。

各官庁との均衡

IUOTO総会にご臨席をお願いした皇太子殿下、同妃殿下の警護問題、総理大臣マツセージ、各国VIPの警護と接遇問題、査証問題、国旗問題、記念切手の発行等々の問題で、宮内庁、東宮御所、総理官邸、警察庁、外務省、法務省、大蔵省等を連日走り回った。

宮内庁、東宮御所、総理官邸などは初体験であり恐る恐る訪れたが、一小役人に対して非常に丁寧かつ親切に接待して頂いて感激した。

国立劇場で開催されたIUOTO総会の開会式にご臨席頂いた皇太子殿下、同妃殿下の警護打合せは秒さみのスケジュールであったが、そのスケジュールも、両殿下のお立ちになる時間が遅れ、警察側はその連絡で大変であった。

国際会議の際、査証が必要であるにもかかわらず査証なしで来日する外国人がかなりずいといつてよい程ある。入国管理局との折衝は厄介であり時間をとられた。

国旗の用意は会場である東京プリンスホテルが長年の経験で準備したが、国交のない国等のものをどうするか等やこしい問題がある。

庁の方に事情をお話したところ、特別の計らいで見学をさせて頂けることになった。私もお蔭で同行し、珍しい所々を見て頂いた。これも思い出の一つである。

国際観光年記念大会の開催

国立劇場におけるIUOTO総会の開会式とともに華やかな記念行事の一つが観光週間中の八月五日東京日比谷公会堂で開催した国際観光年記念大会であった。同大会は「大会宣言」を採択した後、日本の児童及び二カ国の在外公館員の子供達による「世界の子供学芸会」、村田英雄と都はるみによる「国際観光年記念歌謡」の発表と歌唱指導、NHK第一放送「花のバレー」の公開録音が行われた。この模様はテレビ及び日刊紙を通じて一般に広く報道され、そのPR効果は大きかった。

国際観光年記念街頭装飾

IUOTO総会に参加した外国人を歓迎する意味と、国際観光年をPRするため、東京の銀座一丁目から八丁目と新宿の伊勢丹通りに、九月下旬から約一カ月間IUOTO東京総会の歓迎と国際観光年をデザインした街頭装飾を行った。また、これに協力して、銀座の松屋、三越、松坂屋、和光、新宿の伊勢丹の各デパートが大型懸垂幕を掲出したり、ウインドー展示を行った。このように大がかりなPRを行ったのは観光業界では初めてのことで、都内観光に出かけたIUOTO総会出席者が喜んでた。この事業の実施は、観光業界の間で有名な毎日新聞の志村さんに負うところが大きい。

記念切手と記念たばこの発売

記念切手の発行も大変だろうと覚悟して郵政省へ行ったが、切手のデザインをどうするかというだけのことで、大した問題はなかった。ただ、IUOTO総会の会期中、郵便局の臨時出張所を設置するのに手間がかかった。出張所を設けた理由は、国際観光年の記念切手と記念スタンプを押した初日カーバーを販売してもらうためである。

記念たばこの発売も、大蔵省の担当官と専売公社へ依頼に行き、販売地域とたばこの種類を何にするかを協議しただけで、比較的簡単に決まった。

駅弁の包装紙とタクシースティッカーの宣伝

記念たばこの発売の際は、発売地域のたばこ小売店に届出する周知用ポスターを作成配布したが、そのほか、観光関係団体で作成する封筒に貼ってもらうため、国際観光年のマークとスローガンをデザインしたシールと、タクシースティックをもらうためのステッカーをそれぞれ二万枚作成し、関係方面に配布し使用方を依頼した。

タクシースティックに貼られたステッカーはその後何年もの間貼られたままのものがあり、宣伝媒体としては非常に良い。

観光は平和へのパスポート

国際観光年のスローガン「観光は平和へのパスポート (Tourism, Passport to Peace)」は、各種のポスターその他の印刷物、善意通訳パジャマ等あらゆる機会に使用した。今日でも演説でしばしば引用されるなど、人口にかいしやした。

世界観光ボスター展の開催

IUOTO総会の開催時に、IUOTO主催の「国際観光ボスター・コンクール」と「国際観光年ボスター・コンクール」が開催され、その入賞作品を中心に、東京の松坂屋デパートと大阪の阪急百貨店で「世界観光ボスター展」を開催した。この展覧会も多数の観客を集め、非常に好評であった。

同時通訳養成講座の開催

昭和四〇年に「日本コンベンション・ビューロー」が発足し、四一年には当会がそれを吸収したが、我が国で国際会議を開催する上での問題点は、英・日以外の同時通訳の不足であった。そこで、国際観光年を機会にその養成に取り組みることとし、ジュネーブから講師を招へいするとともに、我が国の斯界の第一人者を集めて同時通訳養成講座を開催した。応募者は二六〇人に及んだが、そのうち一八名を選んで約四カ月の訓練が行われた。

IUOTO東京総会の同時通訳も日本語／外国語以外の同時通訳は外国から招いたが、外国語／日本語の同時通訳がどうしてワントーンで運れるのに対し、仏／英等外国語間の同時通訳はスピードも早く分かり易かった。

ドル防衛策

IUOTO東京総会を終えた翌昭和四三年一月一日、ジョンソン米大統領が米国人の海外旅行制限措置を含む項目の特別声明（「ドル防衛策」といわれた。）を発表し、世界中が大騒ぎした。日本でも、各省それぞれ対策会議を開き、民間を含むあらゆる会議でPATA、IUOTO等も早速撤回の方の申し入れを行った。その後米財務省がドル防衛等の

具体案を作成したが、結局議会で廃案となった。

ASTA総会、大阪万博の準備

IUTO総会の2年後に、世界最大の観光団体ASTAの世界大会を東京のホテルニューオータニで開催することになり、昭和四三年から受入対策委員会を設置してその準備に取りかかった。また、昭和四五年の大阪万博の準備もこの年から始まった。

この二つのイベントの準備を担当したが、IUTO総会、東京オリンピックの準備の経験があるため、観光部も振興会もそれ程大騒ぎはしなかった。

ASTA総会参加者から出された苦情のうち多かったのは、いくつかのホテルのベッドが小さ過ぎるのでホテルを変えてくれというものであった。

IUTOの改組

国連の諸機関ではあるが非政府機関であったIUTOを改組して政府機関にし観光問題に対する各国及び国連諸機関の認識を高めようということになり、昭和四三年にWTO設立条約案が作成された。観光局としては、観光事業及び観光機関の地位が高くなることであり、条約案の内容にも特に問題はないので外務省とともに条約案の翻訳作業を開始した。しかし、一部の国から、IUTOを政府機関にする、どうしても国際政治の問題が会議に持ち出され、また発展途上国に対する援助問題が大きな議題となり、加盟国が多い程先進国の提出金負担額が大きくなってその対応に苦勞するようになるという意見が出された。もつとも意見である。

布することにした。ただし大きな問題が二つあった。一つは予算がないこと、一つは効果的に配布する方法である。

一番目の問題は、広告を掲載することによって解決し、トラジャルの協力を得てスポンサーを見つけた。二番目の問題は、旅券発給の際旅券に挟んで各人に渡してもらうことで解決した。当時旅券課と親しくしていたので協力を得られたのである。

マナー読本のタイトルは「今日からあなたも国際人」とし、海外旅行をする際心得ておくべき知識やマナーをわかり易く漫画で解説したもので、内容は外務省その他に見てもあった。配布は昭和四六年三月一日から始めたが、新聞発表後、反響はすさまじく、週刊誌がこぞって日本人海外旅行者の海外行状記などを特集して報道し、日本人のマナーの悪さを海外にまで伝えるという結果を招いた。

「観光部ニュース」のこと

観光部の国際関係業務が増えてきたことから、JNTOの海外事務所への連絡事項や情報を定期的に伝える方がよいと考えた。そこで、昭和四六年五月に手書きの「観光部ニュース」を毎月作成し、JNTO本部を通じて海外事務所へ送ってもらうことにした。

このニュースは翌年まで続けたが執筆者である私が四七年四月にホノルル観光宣伝事務所に赴任したので中止された。

その頃私は、運輸省内の英会話を勉強している人達十数人を集め、毎週一回昼休みに英会話教室を開いていたが、これも海外赴任で中断の止むなきに至った。

WTO憲章は一九七〇年九月採択され、一九七五年一月に発効。我が国は一九七八年七月に加盟した。

東南アジア貿易・投資・観光促進センターの設立

WTOもそうだが南北問題は避けては通れない時代になってきた。昭和四〇年時代からは国際協力関係の仕事が増え、各省庁に国際協力部、国際協力室、国際協力係が生まれ、観光部業務課の宣伝係も四五年七月一日に国際係と名称を改めた。

一九六八年に開催された第三回東南アジア経済開発閣僚会議において、タイから東南アジアの産品の輸出の拡大と、東南アジアへの投資と観光客の流入の拡大を図るため、世界の主要都市に「東南アジア経済開発促進センター」を設置しようとの提案が行われ、一九七〇年には東京で設立作業部会が開催され、私もそれに参加した。

設置されるセンターの名称は「東南アジア貿易・投資・観光促進センター」と3部門を併記する形で決まり、設置場所は取りあえず東京のみとなったが、分担金の割合、設置される3部門の部長、次長をどの国から出すか、また、国際機関なのでその待遇をどのように決めるかというややこしい問題が多く、発足までかなりごたごたが続いた。

最終的に観光部門は政府から当会が受託運営することとなり、昭和四六年二月東京TICCの2階に事務室と展示室が設けられた。

外人研修の思い出

外人研修は六年位担当した。初期の頃は韓国の観光局の課長さんに日本の観光関係法

ホノルル事務所のこと

私が昭和四七年四月に赴任したホノルル観光宣伝事務所は今ももう廃止されていないが、仕事上あまり参考になるようなことは書けないが、この事務所のことを覚えている人も少なくなるので、逆に記録を残す意味で、いくつかの思い出を書いて置くこととする。私が赴任した当時の事務所は、カラカウア通りのモアナホテルの前を左に折れて右側の2軒目であった。JALスチュワードスの定宿であったプリンセスカイウラニ・ホテルの玄関の真前である。事務所は通りに面した一階でショウウィンドーもあり、良い事務所であった。持ち主は国際興業で、一九五七年三月三一日から貸りていた。

事務所の職員は国宗ゆき子さんと前田ジョージさんの二人であった。お二人とも一五年以上の勤続で旅行者、マスコミ、県人会などすべての人に好かれていた人柄の方で恵まれていた。

この事務所は、一九七四年一月に国際興業の都合で立ち退くこととなり、丁度カラカウア通りに面し、一階にJALワイキキ支店とデューティフリー・ショップがあり、JTBや日本旅行も入っていたワイキキ・ビジネス・プラザの事務所が空いたため、その一七階に移転した。新しい事務所は、ビジネスをする上で最高のロケーションにあり、また、日本からのお客様が泊まるホテルのほとんどが歩いて行ける距離にあった。

有吉州知事のこと

所長交代パーティーには総領事、領事のはか有吉ハワイ州知事ご夫妻がお見えになり驚いた。ご夫妻と一緒に撮った写真を見ている

令を教え、ネパールの観光局長に観光行政全般について教えるなど、個人研修がかなりあり、北海道から九州まで観光地の視察旅行に同行した。課長クラス以上の場合、ホテル協会と国観連に依頼して一流ホテル・旅館を予約してもらったので、日本各地の有名ホテル・旅館にかなり泊るという楽しい経験をする事ができた。

集団研修は当初アジア諸国のみであったが、後に中南米諸国からも来るようになった。アジア人のうちインド、パキスタン、ネパールの英語は分かり難かったが2、3か月研修に付き合っているのと分かるようになる。そのため、ネパールの航空会社の一行の添乗や、インドの高官の添乗を他所から頼まれたりした。

中南米の研修生は、今でもそのようだが美人の女性が多かった。ガイド学校の先生などで語学力も教養もあったが、買物好きで常に定めた時間に現れないので苦勞した。

集団研修の時は、いつも振興会の職員三、四人に同行してもらった。これも楽しい思い出である。

「今日からあなたも国際人」

昭和四五年三月一日に旅行用外貨割当てが一回千ドルに引き上げられ、昭和四九年以来毎年二割以上増え続けてきた日本人海外旅行者数は、同年六六万人に、翌昭和四六年には九六万人になった。このような海外旅行者の増大に伴い、日本人海外旅行者のマナーの悪さが海外で問題とされるようになり、国内でも国会で取り上げられるなど、観光部としては何らかの策を打つ必要に迫られた。そこで「マナー読本」を作成して海外旅行者へ配

と当時のことを色々思い出す。その後州知事の所へは観光物産展で来布された県知事さん達に同道して何回か伺った。

帰国後も有吉知事は何回か来日されたが、州知事として最後にお目にかかったのは、ホノルル事務所廃止のお詫びをしに根本会長、大方所長と知事室へ行った時である。有吉知事は、根本会長の説明に対し、「事情はよくわかりました。また、機会があれば再開して下さい」と穏やかに了承して頂いた。もちろん大方所長が知事の側近を通じてあらかじめお話しがあったからのことではあるが。

JAL、JTB支店長

ホノルル時代のことを考えると、やはり毎日のように会っていたJAL、JTBの支店長を思い出す。当時のJALのダウントウン支店長は、現在日本アジア航空の常務をされている波津さんで、JTBの副社長兼ホノルル支店長は昔JTB外人旅行部でホテル係長をしてらした廣江欣四郎さん（帰国後東北支社長、日本交通事業社専務）であった。廣江さんの下には今千葉コンベンションビューローの専務理事をされている田部井さんがおられた。

総領事館の首席領事、JAL支店長とJALホノルル空港所、JTB支店長、JNTO所長の四者は夫妻で毎月定例懇談会を開いていたので、特に懐かしく思い出される。日本の旅行者で当時ホノルルに支店又は駐在員を置いていたのは、JTBのほか日本旅行、近畿日本ツーリスト、ダイヤモンド、PCS（ジャルパック、当時若井さん）、日本通運のみであった。

「ふるさとを訪ねて」

ホノルルへ着任後、報道関係者とは毎日のように宴会で顔を合わせるが、すぐ親しくなった。中でも日本語テレビ局キクテレビの子レクター友澤さんとアナウンサーの沖葉子さんと親しくなり、いろいろ話をしているうちに、「日本紹介番組をやったら」「それは是非」ということになり、毎週、回夕方六時から六時一五分まで「ふるさとを訪ねて」という日本の各県の名所・食物等のスライドを映し、沖アナウンサーが質問し私が答える形式で始めた。これは在任中の約三年間続けた。

そのため本部にお願いして都道府県のスライドをそれぞれ五〇〜六〇枚ずつ集めてもらい、各県一回ないし三回ずつ、景勝地、神社仏閣等の文化財、伝統芸能、年中行事、みやげ品、郷土料理等を紹介した。経費は月百ドル弱という安さであったが、これは米国のテレビ局が毎週教育番組を放映する義務があったため、番組制作費のみというほとんど実費で特別に便宜を提供してもらったものである。

友澤さんと沖さんには本当にお世話になった。日本からくるミッションの団長、郷土芸能団をほとんどキクテレビに出演させてもらったからである。

このテレビ番組のお陰で私はハワイでは有名人になり、レストランへ行くと、必ずじろじろ見られたり、声をかけられた。

日本特集号を出す

これも自慢話になるが、ハワイへ行って一年経ち、予算はないが何か大きなPRをやらうと考え、ハワイ最大の日刊紙ホノルル・

一〇時頃になると東京からニュースやら連絡が入るので一旦中座し、また深夜からゲームを再開して徹夜。翌朝は朝六時からゴルフに出かけるのである。

邦人あつ旋

在住当時、ホノルルは、日本からの来客が最も多い事務所であった。なにしろ受人機関としては総領事館と当会のみが公的機関で、あとJAL、ハワイの銀行へ出向している日本の都市銀行の社員（ハワイでは副頭取）、電通位がお相手をしてた。これら数人は、毎日朝七時頃ホノルル空港に集まり、「今日はどなたのお迎えですか」と情報交換する。時にダブツで依頼が来てたりするからである。当会事務所の場合は都道府県の関係者が多い。代議士さんや各省の人のお世話も随分した。総領事館も人手が少なく、よく当方へ回されてきた。大臣、県知事のあつ旋もかなりあった。

日本からホノルルへ到着する便は、ほとんど朝の七時から八時までの間に着く。ハワイのホテルは午後四時頃にならないとチェックインできないので、朝から観光案内をし、昼ご飯のお世話をし、買物のお世話をし、四時にホテルへお客を入れて、やつと事務所へ出勤し、手紙の処理をして、六時にはまた晩ご飯とフラダンス・ショーのお付き合いにホテルへお客を迎えに行く。一年三六五日ほとんど同じ生活の連続である。地元のパティや、テレビ局の録画どりなど止むを得ないときは、所員の前田さんか、国宗さんにお相手

スター・プレティン・アンド・アドバイザー

で日本特集号を出してもらうことを考えた。日米関係が緊密度を増している時であるから、先方も「広告さえ集めてくれれば」ということなので、早速、日本のホテル業界、旅行業界へ手書きの手紙を出し、広告集めにかかった。JAL、JTBはもちろん協力して頂いたが、そのほかホノルルに駐在していたプリンス・ホテルの丸山さん（ゴルフのハンデは〇で親しくしていた）にお話をしたところ、一ページの全面広告を出して下さった。国内からの申込み第一号は金谷ホテルで（よい企画だ頑張って下さい）のお手紙を頂いた、帝国ホテルその他からもある程度集まったが、まだ足り、掲載する写真も手持ちの良い写真を全部使うことに決まった。

そこで、当初地元からの広告とはならないつもりでいた方針を背に腹はかえられず、とることにした。これにはキクテレビの沖さんとホノルル最大のPR会社社の親しくしていた人が協力してくれて、何とかすべての広告スペースを埋めることができた。もし埋められなかったら何万ドルもの借金ができる所であった。

特集号が出た時は、流石に感激した。早速あちらこちらから電話をもらい、その晩は祝杯をあげた。

その時わかったのは、今の日本もほぼそうであるが、大きな会社の広告は、特定のPR会社なり、特定の人にまかされているというところである。ハワイでは保険の勧誘員も税理士も特定の顧客を握っていて、一年間のうち特定の日、時期だけ働いて、あとは優雅に遊んで暮らしている人が多かった。

をお願いするしかない。観光ツアーでいらしたお客は三泊、四泊するので、お客が重なることも多かった。

その後東京/米本土直行便が運航されるまで、こういう状態が続いた。

保養地マウイ島

米国人観光客はホノルルの喧噪を避けて、マウイ島に一週間位滞在する人が多い。有名なカアナパリのホテル群の泊り客のほとんどは米国人である。米国人はホテルに付属しているゴルフ・コースでプレイしたり、一日中ブルーサイドで本を読みながら身体を焼いて過ごす。時にはレンタカーで、古い港町ラハイナや、古い町ワイルク、新しい町カフルイなどの見物に出かける。

マウイ島で最も素晴らしい観光スポットは標高三〇五六メートルのハレアカラ山の頂上、そこへ立った途端、眼前にあばたの火口がいくつもあまる月の世界が現われる。風が強くかなり寒い。

私は2回頂上まで車で行った。一回は富士山と同様ご来光を拝みに夜半に出発した。一生のうち一度は行かれることをお勧めしたい。ただし、車は中クラスの良いものを選んで方がよい。そして上りはあまり気を付けなくともよいが、下りはエンジン・ブレーキで下りて、あまりブレーキを踏まない方がよい。ブレーキが焼けるおそれがある。

シダの洞窟ーカワイ島

日本からくる新婚カップルの多くがシダの洞窟のあるカワイ島を訪れる。幅が広く水量の多いワイルア川を遊覧船がさかのぼり、ウクレレと歌を聴いているとシダの洞窟のそ

カラオケのこと

在任中、まだカラオケはなかった。毎年、年末年始には、県人会の忘年会、新年宴会が続き、これには必ず一升ビンを二本位寄付して出席しなければならなかった。そして、必ず何か伴奏なしで唄われた。国を出るまで「クラシックに非ざれば音楽に非ず」と思っていた私は、最初に何か唄へと言われて、はたと困った。歌と言えは「菩提樹」、「野ばら」、「おお雲雀」、「すみだ川」、「菜の花」位しか知らない。明治の人達にそういう歌を唄っては悪いだろうと思ひ悩み、また、歌詞カードも何もないので本当に困った。ふと思いついたのが何とか盆踊りなどで覚えていたであろうと思った「東京音頭」である。その晩はそれでお茶をこし、早速翌日アラモアナ・ショッピング・センターにある白木屋へ行って、ホノルルで流行している日本の歌謡曲を仕入れ、メロディと歌詞を暗記した。また、日本語放送局やピアノバーへ行って、ハワイで現地の人がよく唄う「君といつまでも」、「ここに幸あり」を覚えた。そのお蔭でシェラトン・ワイキキのバーの専属歌手であったメルビン・リードと親しくなり、行くと必ず舞台へ引つ張り出されて、二人で「君といつまでも」を唄った。もつとも彼女は数か国語で「君といつまでも」を唄い、東京音楽祭にも出演している。彼女のサイン入りレコードは、今でも大切に持っている。

土曜の夜

土曜の夜、日本からお客が来ていない時はキクテレビの友澤さんの家で毎週開かれていた報道関係者の麻雀大会に参加した。お蔭でマスコミの人達と親しくなった。彼らは夜

ばの船着場へ着く。熱帯のジャングルの中の道を少し行くと洞窟へ出る。そこではハワイアン・ウエディング・ソングを地元の人が歌って雰囲気盛り上げていた。

カワイ島にはハナレイという美しい溪谷があり、ゴルフ好きの人には楽しいゴルフコースもいくつかある。緑の美しい日本人好みの島と言える。

火山の島ーハワイ島

ハワイ諸島の中で一番大きい島なので「ビッグ・アイランド」と呼ばれるこの島は、阿蘇を思い出す大きな死火山の火口と常に小さな噴火が続いている平らな火口原を見ることが出来るキラウエア山及び富士山より高い標高四一六八メートルのマウナ・ロアがある。

この島を車で一周してみたら、桜島の何十倍もある溶岩のつらなりの中に道があり、それが延々と続く。ヒロの町から見て島の裏側へ行くと大きなリゾートが開発されている。

オアフ島

ワイキキのあるこの島はよく知られているので省略するが、現地に住んだ人でないとい知らない穴場があるので、どうしてもそういう所へ行つて見た方は私へお電話下さい。三〇年の思い出の半分までできました。後半はお許し願えれば次号に書かせて頂きます。